

十卷本『伊呂波字類抄』の位置付け

河野敏宏

〔目次〕

- 一、はじめに
- 二、植物部の比較
- 三、人事部の比較
- 四、辞字部の比較
- 五、疊字部の比較
- 六、まとめ

一、はじめに

『色葉字類抄』『伊呂波字類抄』『世俗字類抄』『節用文字』など、「イロハ字類抄」系統の諸本については現在までに様々な研究がなされてきた。しかし、「イロハ字類抄」系統における諸本の位置付けという点に関しては、未だ明確にされているとは言い難く、特に十卷本『伊呂波字類抄（以下、十伊と略称する）』の位置付け

については、①三卷本『色葉字類抄（以下、三色と略称する）』を増補したものとす（注1）る説、②これを疑（注2）う説の二者がある。

本稿では、「イロハ字類抄」系統の諸本、すなわち、『節用文字（以下、節用と略称する）』・二卷本『世俗字類抄（以下、二世と略称する）』・二卷本『色葉字類抄（以下、二色と略称する）』・十伊・三色の内容を比較検討することにより、特に、十伊の、「イロハ字類抄」系統における位置付けを試みたい。

比較調査の対象としたのは、諸本の加篇の植物・人事・辞字・疊字の四部である。加篇を対象とした理由は、諸篇の中で、加篇の収録語数が最も多いからである。語数の少ない篇では、諸本の違いが明確にならないことが多い。また、植物・人事・辞字・疊字の四部を対象とした理由は、これらの部は、収録語の配列の点で、諸本の違いが顕著にあらわれ易い部だからである。

この比較調査の結果、次の結論を得た。

①十巻本『伊呂波字類抄』の原本(Xと仮称する)は、「イロハ字類抄」系統のかなり初期の体裁を有していた。

②現存の十巻本『伊呂波字類抄』は、Xを更に増補した書である。

③Xは、二巻本『世俗字類抄』・『節用文字』の祖本を大幅に増補した書である。

これらの点について、各部を比較検討した結果を示しつつ詳述する。

二、植物部の比較

まず、植物部の比較検討を行う。

植物部の内容を比較する際に重要なことは、増補・改良の過程を考慮することによって、諸本の相互関係をより正確に知ることができるといふことである。現存諸本の中で、ある種の本の内容に改良・増補を加えた内容を有していることがわかっているものは節用と十伊である。前者について、石野つる子氏は、現存本の節用は前

部が原形で、後部は後の増補であるとされた^(注3)。従って、原形本節用の植物部の内容は、現存本の前部の如き状態であったことが推定される。また、後者については次のとおりである。川瀬一馬氏が、『古辞書の研究』(三四六頁)において、

植物・動物等の名を多く増補してゐる事も亦目に着く点であるが、それ等は、本草和名や康頼本草に據つて増補してゐる事は両者を比較すれば明瞭である。語彙の配列注記等に至るまで一致してゐる。

と述べておられるとおり、十伊植物部には『本草和名』から引用している語が大変多い(『康頼本草』からの引用と判断される例は現時点では見出してはいない)。これらの語は、ひとまとまりになって引用されているので、それ以外の部分と容易に識別できる。従って、現存本の十伊植物部から、これらの『本草和名』からの引用部分を除いてゆけば、十伊の原形本Xの植物部の内容が推定できることになる^(注4)。

一例をあげる。

芥 カイラシ 辛菜 カシ 菘 カシ 有甘菘 楊子種 昔出 爾果注 白芥子 出 菘
鼠芥 鼠食花 而皮全皆 爾果故以名之 雀芥 雀食其子 而皮全皆 爾果故以名之
已上二名 出 菘 已上四名 カシ 見 本草

(十伊 加篇 植物)

芥又有其良補益性良 白芥子出蘇 鼠芥鼠芥其味而皮毛 崔芥崔芥其子
而能去積故以名之 已上二名出舊集 和名加良之

(日本草和名 下36ウ)

この例の場合、「芥 辛菜 菘」はX収録語、「苺」以下は『本草和名』による増補である。

以上、現存本節用と十伊の植物部について、その内容は、原形本の内容とそれ以後の増補部分の内容とをあわせもった状態であることを述べたが、二世・二色・三色については、そのような様相はみられないので、特に断らないかぎり、現存本の内容そのままを資料として用いる。

さて、節用の原形部分(以下、原節用と略称する)二世・X・二色・三色の植物部を比較してみると【表一】のようになる。

【表一】 数字は、諸本における配列順序を示す。この配列は、三色の配列を基準とする。三色の配列が諸本の中で最も整っているからである。声点・注は省略する。

二世	原節用	X	二色	三色
1 答竹 <small>カンチク</small>	1 答竹 <small>カンチク</small>	3 答竹 <small>カンチク</small>	6 答竹 <small>カンチク</small>	答竹 <small>カンチク</small>
2 苦竹 <small>カハタケ</small>	3 答竹 <small>カハタケ</small>	1 苦竹 <small>カハタケ</small>	7 答竹 <small>カハタケ</small>	答竹 <small>カハタケ</small>
3 河竹	4 河竹 <small>カハタケ</small>	2 河竹 <small>カハタケ</small>	8 河竹 <small>カハタケ</small>	河竹 <small>カハタケ</small>
6 石竹 <small>カラフヒ</small>	6 石竹 <small>カラフヒ</small>	8 石竹 <small>カラフヒ</small>	9 石竹 <small>カラフヒ</small>	石竹 <small>カラフヒ</small>
8 辛芥	8 辛菜 <small>カハタケ</small>	5 辛菜	12 神草 <small>カハタケ</small>	神草 <small>カハタケ</small>
7 芥 <small>カラシ</small>	7 芥 <small>カラシ</small>	4 芥 <small>カラシ</small>	13 苦苺 <small>カハタケ</small>	苦苺 <small>カハタケ</small>
9 萱 <small>カヤ</small>	9 萱 <small>カヤ</small>	16 萱 <small>カヤ</small>	14 防己 <small>カハタケ</small>	防己 <small>カハタケ</small>
10 荊萱 <small>カルカヤ</small>	10 荊萱 <small>カルカヤ</small>	18 荊萱 <small>カルカヤ</small>	15 辛菜 <small>カラシ</small>	辛菜 <small>カラシ</small>
11 黄連 <small>カクモクサ</small>	11 黄連 <small>カクモクサ</small>	70 黄連 <small>カクモクサ</small>	16 芥子 <small>カハタケ</small>	芥子 <small>カハタケ</small>
27 黄草 <small>カイナ</small>	27 黄草 <small>カイナ</small>	55 黄草 <small>カイナ</small>	17 菘 <small>シラカ</small>	菘 <small>シラカ</small>
		56 蓋草	18 萱 <small>カヤ</small>	萱 <small>カヤ</small>
		71 王連	19 荊萱 <small>カルカヤ</small>	荊萱 <small>カルカヤ</small>
		70 黄連 <small>カクモクサ</small>	20 黄連 <small>カクモクサ</small>	黄連 <small>カクモクサ</small>
		55 黄草 <small>カイナ</small>	21 王連 <small>カクモクサ</small>	王連 <small>カクモクサ</small>
		56 蓋草	22 蓋草 <small>カクモクサ</small>	蓋草 <small>カクモクサ</small>
		71 王連	23 黄草 <small>カイナ</small>	黄草 <small>カイナ</small>
		70 黄連 <small>カクモクサ</small>	24 麻黄 <small>カクモクサ</small>	麻黄 <small>カクモクサ</small>

15 雀瓢 カハチクサ	14 女青 カハチクサ	13 白芷 カサモチ	47 草麻 カサモチ	72 王不留行 カサモチ
14 雀瓢 カハチクサ	13 女青 カハチクサ	12 白芷 カサモチ	77 草麻 カサモチ	75 王不留行 カサモチ
76 雀瓢 カハチクサ	74 女青 カハチクサ	73 白芷 カサモチ	77 草麻 カサモチ	78 王不留行 カサモチ
30 雀瓢 カハチクサ	29 女青 カハチクサ	28 白芷 カサモチ	27 草麻 カサモチ	25 王不留行 カサモチ
雀瓢 カハチクサ	女青 カハチクサ	白芷 カサモチ	草麻 カサモチ	王不留行 カサモチ

(以下略)

【表一】から次のことがわかる。

①三色とその他の本との配列順序を比較すると、三色とXとは全く異なるが、三色と他の三本とは比較的似ている（特に二世は非常によく一致している）。三色の植物部は、峰岸明氏によって指摘されているように、細かい分類によってよく整理されているから、結局、Xの分類が最も未整理な状態を示していることになる。

②同訓異表記のグループ（例えば、「カラシ」等）に収録されている語数は、二世・原節用がよく一致し、またX・二色・三色がよく一致している。

そして、植物部全体について同様にして調査すると、次のことがわかる。

③収録語数では二世・原節用がよく一致し、またX・二色・三色がよく一致している。そして後者の収録語数

は前者よりかなり多い。

三、人事部の比較

次に人事部について比較検討する。

人事部に収録されているのは、人間の精神活動を表現する語や芸術・産業に関する語である（芸術・産業に関する語は人事に関する語の次にまとめて収録されている）。人事に関する語の部分では、どの本においても、ある一つの訓に該当する漢字（熟語の場合もある）が一箇所にまとめられた形になっている（以下、この一まとまりを「同訓群」と仮称する）。その一例として「カナシフ」の同訓群を示す。

二色	悲 カナシム	憐 カハチクサ	憐 カハチクサ	憐 カハチクサ	憐 カハチクサ
原節用	悲 カナシフ	憐 カハチクサ	憐 カハチクサ	憐 カハチクサ	憐 カハチクサ
十俣	悲 カナシフ	憐 カハチクサ	憐 カハチクサ	憐 カハチクサ	憐 カハチクサ
二色	悲 カナシフ	憐 カハチクサ	憐 カハチクサ	憐 カハチクサ	憐 カハチクサ
三色	悲 カナシフ	憐 カハチクサ	憐 カハチクサ	憐 カハチクサ	憐 カハチクサ

捨 臨 慟 咽 嗚 噫 慟 涼 憐 矜 矧 傷 悵 折 總 悵 慟 擗 羿 悽

臨 慟 咽 嗚 噫 慟 涼 憐 矜 矧 傷 悵 折 總 悵 慟 擗 悽

慟 咽 睇 嗚 噫 慟 涼 憐 矜 矧 傷 悵 折 總 悵 慟 擗 悽

二世	賢 カシヨシ	3 頑 カタクナシ	女利カ、
原節用	賢 カシヨシ	3 頑 カタクナシ	女利カ、
十伊	賢 カシヨシ 賢 カシヨシ 戒 カイ (後出)	頑 カタクナシ 頑 カタクナシ	利カ、
二色	賢 カシヨシ	24 頑 カタクナシ	女利カ、
三色	賢 カシヨシ	25 頑 カタクナシ	女利カ、

10/

この配列は十伊の配列を基準とする。各同訓群の最初の漢字だけを示す。声点・注は省略する。

【表二】 数字は、諸本の同訓群の配列順序を示す。この例からわかるように、一つの同訓群における収録漢字及びその配列順序は、二世・原節用のグループと十伊・二色・三色のグループで、それぞれよく一致している。なお、この点からだけでは、前者のグループと後者のグループとの間には、量的差異が認められるにすぎないが、同訓群そのものの配列順序を調べると【表二】のようになっており、同訓群の配列順序の点では、また異なった様相を呈する。

悽	悽	悽	悽
悽	悽	悽	悽
悽	悽	悽	悽
悽	悽	悽	悽

6 狩 カリ	7 傳 カシツク	8 好 カヨヨシ	11 祖 カタヌク	12 暨 カタシキリ	16 伎 カチ	15 悲 カナシ	14 感 カム	2 豪 考	19 戒	17 沐 カシラアラフ	18 浴 カハアラム	21 諸 カタヘ	10 軒 カタム	9 姦 カタメシ			
6 狩 カル	7 傳 カシツク	(7) 美 妹 日	10 祖 カタヌク	11 暨 カタシキリ	14 伎 カチ	13 悲 カナシフ	12 感 カム	2 豪 カウ	17 戒 カイ	15 沐 カシラアラフ	16 浴 カハアム	19 諸 カタエ	9 軒 カタム	8 姦 カシアシ			
狩 カリ	傳 カシツク	好 カヨヨシ	祖 カタヌク	暨 カタシキリス	伎 カチ	悲 カナシフ	感 カムス	豪 カウナリ	行 考セ	戒 カイ(重出)	臭 カウ	沐 カシラアラフ	浴 カハアム	癩 カワ	諸 カタヘ	軒 カタメシ	姦 カタム
5 狩 カル	16 領 カシツク	15 姦 カヨヨシ	19 祖 カタヌク	26 暨 カタシキリ	6 陸 カチ	20 悲 カナシフ	11 感 カンス	1 豪 カウナリ	2 行 カウ	7 戒 カイ	8 臭 カウ	29 沐 カシラアラフ	21 浴 カハアム	(11) 感(重出) 癩 日	12 諸 カタヘ	10 軒 カタム	18 姦 カシメシ
5 狩 カリ	17 領 カシツク	16 姦 カヨヨシ	20 祖 カタヌク	27 暨 カタシキリ	6 陸 カチ	21 悲 カナシフ	11 感 カムス	1 豪 カウナリ	2 行 カウ	7 戒 カイ	8 臭 カウ	31 沐 カシラアラフ	22 浴 カハアム	12 癩 カタハ	13 諸 カタエ	10 軒 カタム	19 姦 カシメシ

(12 暨 カタシキリ)	20 白地蔵 アソビ	22 步射 カチユミ	24 擲倒 カヘリウ	25 神樂 カクラ
(11 暨 カタシキリ)	18 白地蔵 アソビ	20 步射 カチユミ	24 擲倒 カヘリウツ	22 神樂 カクラ
形 カタチ	暨 カタシ(重出)	悪 カタチミツク	擲倒 カヘリウ	神樂 カクラ
9 形 カタチ	(26 暨 カタシキリ)	31 悪 カタチミツク	28 擲倒 カヘリウ	13 神樂 カクラ
9 形 カタチ	(27 暨 カタシキリ)	33 悪 カタチミツク	29 擲倒 カヘリウツ	14 神樂 カクラ

(以下「術藝・産業」は省略する)

つまり、十伊の同訓群の配列順序は、二世・原節用とよく一致しており、二色・三色のそれとは大きく異なっているということである。この理由は、二色・三色が、訓の仮名文字の数によって同訓群を配列していることにある。特に三色では、改行・星点によって、その配列を一層明確に示している。(ただし、この仮名文字数による配列は、人事に関する語についてのみ行われているのであって、芸術・産業に関する語についてはこの限りではない。)これに対し、二世・原節用・十伊の配列順序には何の規則性も窺えない。

四、辞字部の比較

次に辞字部について比較検討する。

辞字部の収録語は、「カツ・カスカナリ・カタフク」のように、ほとんどが用言であるが、稀に、「カツテ」の如き副詞、「カレ」の如き代名詞、「カ(香)」の如き名詞、「カナ(哉)」の如き助詞なども収録されている。そして、どの本においても、前述の人事に関する語と同様に、ある訓に該当する漢字が一箇所にまとめて収録されている。その一例として「カタル」の同訓群を示す。

二世	語カタル	談	話カタラフ	議
原節用	語カタル	談カ	話カタラフ	議カ
十伊	語カタラフ	談カタラフ	話	議
二色	語カタル	談	話	議
三色	語カタラフ	談	話	議

善	誘	言	諫	諄	諄	白	諄カタル
善	誘	言	諫	諄	白	諄カタル	諄カタル
善	誘	言	諫	諄	白	諄カタル	諄カタル

この例からわかるように、一つの同訓群における収録漢字及びその配列順序は、二世・原節用のグループ、十伊・二色・三色のグループにおいて、それぞれよく一致している。しかし、同訓群そのものの配列をみると、やはり、人事の場合と同様に、二世・原節用・十伊がよく一致し、二色・三色がよく一致している。また、辞字部については、十伊には、二世や原節用には収録されていない訓が比較的多く収録されており、それらは二色・三色にも収録されている。

つまり、十伊は、人事部・辞字部に関しては、収録語数の点では二色・三色と同様であり、同訓群の配列順序

では二世・原節用と同様であるということになる。おそらく、これは十伊がXの人事部・辞字部の状態をそのまま引き継いだためであろうと考えられる。

五、疊字部の比較

最後に、疊字部の比較検討を行う。

疊字部は、音読・訓読の熟語（以下、音読語・訓読語と略称する）を収録した部であり、その大部分は音読語である。まず初めに、この音読語・訓読語の分類方法の点から諸本を比較する。

二世では、前部に訓読語を収録し、その後に音読語を収録するが、この音読語の中に訓読語が混じる場合もある。加篇にはその様な例はないが、例えば多篇では、

…道路 一理 一心 一透 向使タヒ 相徒ヲミ
直人ヲ 湯鏝ヲカ、 脱漏 擔石 對揚 題目
一名…

のように音読語の中に訓読語が混じっている。

原節用でも同様に、前部に訓読語、その後に音読語を収録するが、その音読語の中に、訓読語が混じっている

場合がある。

十伊では、二世・原節用とは逆に、前部に音読語、後部に訓読語を収録している。そして、訓読語の中に音読語が混じっている場合がある。加篇の一例を示す。

…威儀カシツ 斥言カタナ 龜トカノウラ 謀龜用
借老カイウ 容造カクイウ 覺悟 割量 物絆カヘロタス
耿介カウカイ 酷烈 総領カウレウ 不肯カエムセス …

また、この他にも、十伊が二世・原節用と大きく異なる点として、頭字が同じである熟語を一箇所に集めているという事実がある。加篇の一例を示す。

加冠 級 階 納 被 護 持
以 供 被 擧 恭

二世・原節用でもこの傾向はみられるが、完全とは言えない。例えば、二世の加篇では

勘濟 一発 一責 一問 一返

のように「勘」を頭字にもつ熟語が一箇所にまとめられている箇所があるが、間に三六語おいて、再び、

勘會 一合

という様に「勘」を頭字にもつ熟語がでてくる。この種の例は至る所にみられる。原節用でも同様である。以上の事実により、十伊は、二世・原節用よりも一段階す

んだ疊字部をもつていえると言えらるであらう。

さて、次に二色をみると、前半に音読語を収録し、その後には訓読語を収録している。この点は十伊と同様であるが、音読語と訓読語がほとんど混じりあっていない点に異なっている。従って、音読語・訓読語の分類整理という点においては、二世・原節用・十伊よりは進んだ形になっていると言えらる。しかし、その一方、十伊のように頭字によってまとめられているわけではないので、二色は十伊とは直接の影響関係はない本であり、かつ、二世・原節用よりは音読語・訓読語の分類整理の点で一步進んでいる本であるということができらる。

最後に三色について述べらる。この本も、まず、音読語を収録し、その次に訓読語を収録している。そして、この二つの部分の区分は、星点によって明確に示されている。しかし、この点以上に他の本と大きく異なるのは、音読語に関しては意義分類がなされていることである。^(注6) この分類方法は他の本には全くみられないものであり、意義分類の点では、諸本中で最も進んだ形をもつていえることになる。

以上、分類方法の点から、諸本の比較を行つたが、次

に、収録語の点から比較する。諸本の、加篇収録語の一致の程度を【表三】として示す。(ここでいう「一致」とは、ある本にその語が収録されていることをいう。)

【表三】 数字は諸本における語の配列順序を示す。

この配列は現存本節用の疊字部を基準とする。なぜならば、現存本節用の疊字部の場合、原節用に収録されていた部分と後の増補による部分との境目が明確ではなく、他の本との比較によってそれを確認する必要があるからである。

二世	現存本節用 十伊	二色	三色
1 勾引 カトフ	勾引 カトフ 611 勾引	88 勾引 カトフ	283 勾引 カトフ
2 切悞 カキカム	切悞 カキカム 609 切悞 カキカム	89 切悞 カキカム	284 切悞 カキカム
3 歸歟 カニチナ	歸歟 カニチナ 612 歸歟 カニチナ	90 歸歟 カニチナ	285 歸歟 カニチナ
4 只旦 カハカリ	只旦 カハカリ 613 只旦 カハカリ	91 只旦 カハカリ	286 只旦 カハカリ
5 纏頭 カツケモ	纏頭 カツケモ 614 纏頭 カツケモ	92 纏頭 カツケモ	287 纏頭 カツケモ
6 阪池 カタチ	阪池 カタチ 617 阪池 カタチ	93 阪池 カタチ	287 阪池 カタチ
7 参差 カタチナリ	参差 カタチナリ 615 参差 カタチナリ	94 参差 カタチナリ	288 参差 カタチナリ
8 早臈 カハツ	早臈 カハツ 339 早臈	1 早臈 カハツ	64 早臈 カハツ
9 拵許 カワシム	拵許 カワシム 241 拵許	2 拵許 カワシム	168 拵許 カワシム

11 寒温	寒温 <small>カウシ</small>	339 寒温	女寒温 <small>カウシ</small>	4 寒温 <small>カウシ</small>
12 寒燠	寒燠 <small>カウシ</small>	239 寒燠 <small>ナリ、カ</small>	5 寒燠 <small>カウシ</small>	5 寒燠 <small>カウシ</small>
13 閑散	閑散 <small>カウシ</small>	34 閑散	6 閑散 <small>カウシ</small>	140 閑散 <small>カウシ</small>

(以下略)

具体例をすべて列挙することは、紙数の都合上不可能なので、「表三」を図式化したものを「表四」として示し、それに基づいて一致・不一致の状態を説明する。

【表四】

			二世収 録語終	A 1	二世
			節用収 録語終	B 1	節用
十伊収 録語終	E	C 1	B 2	A 3	十伊
	D 1	二色収 録語終	B 3	A 4	二色
		C 2	B 4	A 5	三色
	D 2	C 3			
		三色収 録語終			

以下、詳述する。

まず、諸本の収録語は次の様になる。

二世 | A 1

節用 | A 2 · B 1 (現存本節用の各部門から二世と

一致する部分を抽出して、これを原節用と推定することが可能であるとすると石野つる子氏(注7)の説に従えば、原節用の収録語は A 2 であり後に増補された語は B 1 ということになる)

十伊 | A 3 · B 2 · C 1 · D 1 · E

二色 | A 4 · B 3 · C 2

三色 | A 5 · B 4 · C 3 · D 2

次に、各部分における一致の程度を検討する。

まず、A 1 の部分に収録されている語(約一〇〇語)は他の四本のいずれにもよく収録されているという事実が指摘できる。この場合、注目すべきことは、二世・原節用・二色ではその収録順序までもがよく一致しているということである。二色の場合、二世・原節用とは異なって訓読語を後におさめているから、収録順序を示す番号は 1 から始まっているわけではないが、順序はそろっている。また、十伊・三色においては、訓読語の部分だ

けは順序がそろっている（音読語の部分は、両書とも独自の分類法を採用しているので順序はそろわないのが普通である）。

次に、B1の部分に収録されている語（七六語。A2と重複している語は除いた）と十伊・二色・三色の収録語との一致の度合いを調べると、B2に収録されるべき語（すなわち、十伊の収録語のうちB1の収録語と一致する語）は三六語（B2/B1 約四七％）、以下同様にして、B3に収録されるべき語はわずかに三語（約四％）、B4に収録されるべき語は五五語（約七二％）である。十伊・三色の間で四七％と七二％の差がでる理由は、石野つる子氏が述べているように、^{（注3）}原節用を増補した部分の一部は三色と関係があることによるのではないかと考えられるが、現時点では判断できない。

次に、C1〜3の部分について述べる。C2に収録されている語（すなわち、二世収録語のうち、A4・B3に収録されなかった語を集めた部分。二八語）と十伊・三色の収録語との一致の度合いを調べると、C1に収録されるべき語（すなわち、十伊の収録語のうちC2の収録語と一致する語）は二二語（C1/C2 約七九％）

であり、同様にして、C3に収録されるべき語は二五語（約八九％）であり、高い一致率を示す。前述のB1とB2・B4との一致率よりかなり高い。偶然の一致ということも理論上は想定し得るが、しかし、D1（十伊収録語のうち、D2に一致する語）とD2（三色収録語からA5・B4・C3を除いた残り）の一致率は約三一％であり、十伊・三色両書の収録語が偶然一致する率はこの程度とみなしてよいから、C1・C2・C3の一致率の高さは有意とみるべきであり、偶然の一致とは考えがたい。この傾向は他の篇でも看取される。

さて、以上、個別に検討した結果を総合すると、疊字部については次の様にまとめることができる。つまり、五本の疊字部については、二世・原節用の部分が最も古い形を残している。節用はこの部分にB1の部分^{（注4）}を付加して成立した。また、十伊・二色・三色はこの最も古い部分にC2を付加した内容を共有しており、これら三本の基はA+Cの如き内容であったことが窺える。また、この三本においては、このA+Cの内容に独自の増補を施している。

六、まとめ

植物部・人事・辞字・疊字の四部について調査した結果に基づき、結論を述べる。

最初に、五本の四部の特徴をまとめた結果を表五として示す。

〔表五〕

現存本 二世	整理され ている	未整理（ 同訓群の 配列はX	未整理（ 訓読語は 前部）	各部とも にXより かなり少
原二世 （推定 ）	未整理（ Xとほぼ 同じ）	未整理（ 同訓群の 配列はX とほぼ同 じ）	未整理（ 訓読語は 前部）	各部とも にXより かなり少 ない）
	植物	人事 辞字	疊字	収録語数

二色	十伊	X（推 定）	原節用 （推定 ）	
整理され	未整理	未整理	整理され ている	
訓の仮名	未整理	未整理	未整理（ 同訓群の 配列はX とほぼ同 じ）	とほぼ同 じ）
未整理（	頭字によ って整理 されてい る	未整理	未整理（ 訓読語は 前部）	
各部とも	Xの植物 ・疊字を 増補	原二世・ 原節用を かなり増 補	各部とも にXより かなり少 ない）	ない）

	ている	文字数に よって整 理されて いる	訓読語は 後)	Xとほぼ 同じ
三色	整理され ている	訓の仮名 文字数に よって整 理されて いる	意義分類 によって 整理され ている	二色の量 字を増補

まず、植物部をみると、最も語数の少ないのは二世と原節用である。ところが、Xにみられるように植物部の当初の状態は未整理であったと推定できるから、系統の最初の形態としては、二世・原節用程度の語数を有し、かつXのように未整理である書を想定する必要がある。本稿では、この書を原二世と仮称する。そして、原二世の植物部を改良してゆく過程の一例を仮説として示せば次の様である。

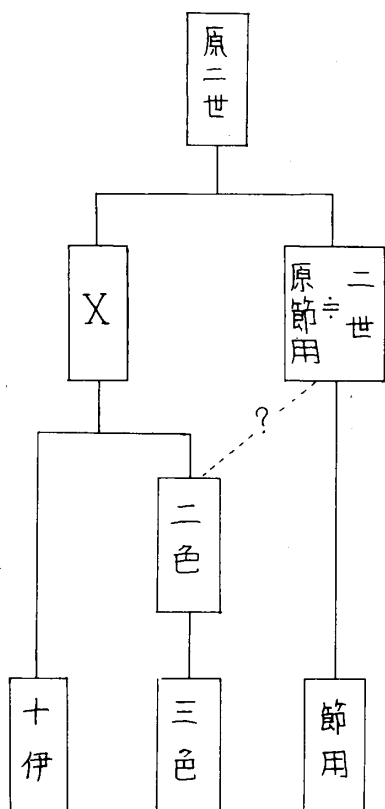
まず、原二世の植物部を語数の面で増補した書X

(ただし配列は未整理のまま)と、配列のみを整理した書二世とが成立する。また、Xの配列を整理して二色が成立する(この場合、二世で行われた整理と二色で行われた整理との間に何らかの関係があったのか否か、つまりどちらかが一方の配列を参考にしたのか、あるいは偶然に似た配列になったのか、については判断材料がないため判断できない)。そして、Xを『本草和名』によって更に増補して十伊が成立し、また、二色の内容が三色へと受け継がれる。一方、二世の内容に増補を加えて節用が成立する。

この仮説は、人事・辞字・疊字三部の検討結果とも矛盾なく成立する。例えば、人事・辞字両部については、次のように考えられる。

原二世は、原節用・現存本二世と同様の内容を有しており、Xでは、原二世の同訓群の配列の整理はおこなわれず、同訓群内の漢字の数が増補されるにとどまった。そして、二色に至って訓の仮名文字数によって同訓群の配列の整理が行われ、それは三色に引き継がれた。

また、疊字部については、次のように考えられる。



まず、最初に原節用・現存本二世の如き体裁があり、Xに至って語数が増補されて、それが二色にうけつがれた。そして、三色では二色の語数をさらに増補して意義分類を行い、十伊ではXの語数を更に増補し頭字でまとめた。

なお、この過程を想定する際、「Xの疊字部には原節用・原二世程度の数の語しか収録されておらず、十伊は原節用・原二世を増補した二色から語をうけついで整理して成立した」という想定は成立し難い。なぜならば、二色の植物・人事・辞字は整理されており、十伊が疊字部だけを参考にしたとは考え難いからである。

以上の推定に従って、「イロハ字類抄」の系統関係の一つの例を図示すると次の様である。

この他にもいくつかの系統試案を出すことができるがそれらの試案は少なくとも次の三点を満たすものでなければならぬ。

- ① 十伊は、二色・三色から派生したものではないのでその原本Xを二色・三色以前に設定する。
- ② Xは「イロハ字類抄」系統の中間的な内容をもっていたと考えられるので、X以前の形態をもつ祖本を設定する。
- ③ 現存本節用（前半部）・現存本二世は、「イロハ字類抄」系統の古い形態を比較的よく保っているため、その原本はX以前に設定する。

【使用テキスト】

- 節用―白帝社複製本
- 二世―天理図書館蔵本の写真
- 十伊―大東急記念文庫蔵本の複製本（『古辞書叢刊』所収）
- 二色―尊経閣文庫蔵本の複製本（『古辞書叢刊』所収）
- 三色―尊経閣文庫蔵本の複製本（風間書房）

七卷本『世俗字類抄』―尊経閣文庫蔵本の複製本―

『古辞書叢刊』所収)

『本草和名』―『日本古典全集』所収の複製本

【注】

一、川瀬一馬氏をはじめ、多くの先学が同趣旨の説を述べておられる。

二、峰岸明氏は『色葉字類抄 研究並びに 総合索引』解説において、篇名表示の真仮名の状態から、十伊は三色を継承発展させたものとは考えがたい面のあることを述べておられる。

三、「節用文字の位置―色葉字類抄及び世俗字類抄との比較より見たる―」(『国語と国文学』第三〇三号 昭和二十四年七月号)

四、この点については、昭和五五年度秋季国語学会で発表した。『国語学』第一二四輯(昭和五六年三月) 五五頁 発表要旨参照。

五、注二の文献参照。

六、注二の文献参照。

七、注三の論文参照。

八、注三の論文参照。

【付記】

本稿は第五一回訓点語学会研究発表会(昭和五九年十月十九日)での発表をまとめたものです。発表の席上、峰岸明氏から、氏も同趣旨のお考えをもっていらっしやる旨をうかがいました。記して感謝申し上げます。峰岸氏のお考えは、「字類抄の系譜―人事・辞字両部所収語の検討を通して―(上)―(中)―(下)―」として、『国語国文』(第五十三巻 第九・十・十一号)に掲載されました。ただ、公刊されたのは学会後でしたので、発表前に拝読させていただくことができず残念でした。

また、二巻本『世俗字類抄』の閲覧を快く御承知くださいました天理図書館に厚く御礼申し上げます。

昭和六十一年十二月五日受理